卒業論文

生き残り戦略と多様化する学校役割

―I 教員の二つの高校をめぐる語りから―

2019 年度入学
文学部　社会学・地域福祉社会学
1LT19015K　山田航生

2022 年 1 月　提出

要約

近年、日本社会は大きく変動し、それに伴い学校教育には激しい変化が起こっている。そのような中、学習指導要領も改訂され、学校の社会の中での役割や学校の在り方がより問われている。しかしこれまでの学校の役割や機能に関する体系的な研究は、都市部での研究が主であり、学校の役割や機能が画一的に語られているのではないかと考える。しかし実際は学校の役割や機能は非常に多様的であり、各学校によってそれぞれ違った役割を持っているのではないか、と考えたのが研究の動機である。

二章では先行研究をまとめている。まず、これまで社会学で語られてきた学校の社会的機能について、デュルケームやブルデュー、ウィリスを引用しながら述べる。主な学校の社会的機能としては、子どもの社会化、選抜配分による階層再生産機能が挙げられる。次に家族と貧困世帯と学校の関係性について、本田（2008）と林（2016）の論を用いて説明している。家庭への教育プレッシャーから母親が教育の格差と葛藤に苦しむ様子、そして貧困の世代再生産のプロセスについて述べている。そして最後に直近の教育をめぐる政策について簡単にまとめている。学習指導要領改訂の一番のポイントとしては「社会に開かれた教育課程」が挙げられ、地域などと協働しながらの学校づくりが求められていることが政策からも読み取ることができる。

三章では調査の分析を行っている。調査は一名の県立高等学校教員を対象に、半構造化インタビューにて行った。Ｉ先生が現在勤務されているＡ高校と、以前勤務されていたＢ高校の二つの高校について主に語っていただいた。調査の目的は、学校の役割がどのような要素から規定されているかを明らかにし、それらについて深堀していくことである。主に七つの要素から分析していった。校訓・教育目標、生徒・保護者、社会からのニーズ、立地、地域との関わり、政策・行政、学校戦略・現場教員の活動の七つである。これらについてＩ先生のインタビューから深堀を行っていった。生徒・保護者の要素での分析では、特にＢ高校における貧困の世代的再生産のプロセスの一部が垣間見れた。保護者の経済力がなく、子供に関心を向ける余裕がなく、子どもが学習を行える環境が整わない。結果的に子どもの進路実現につながらず、階層再生産が起こることになる。家庭内に教師たちは介入することができない難しさも語られていた。立地の要素での分析では、学校の立地を生かした取り組みの重要性が語られていた。立地は学校のカラーを出すうえで一番重要な要素であるとＩ先生は語る。立地に伴う交通網や周辺の環境、住民によって、学校がどのような取り組みを行っていくべきか、役割を果たしていくべきかが変わってくるとＩ先生は主張していた。また政策・行政の要素での分析では、学習指導要領をはじめとした政策が現場に降りてはくるものの、それらの実行は現場教員にゆだねられていてうまく浸透させることができていない現状も明らかになった。国の政策がうまく浸透しないことは国全体で統一した教育が行われないことを意味する。これらを教員たちがどうとらえているかについても分析を行った。

四章では、インタビューの分析を踏まえ、いくつか考察を行っている。まず、学校の役割を規定する諸要因を整理し、それらがどのように学校の役割に影響を及ぼすかのプロセス

を考察した。学校としてずっと変わらないもの、時代によって変わっていくもの、学校が自ら変えていくものの三つに分けている。その中でも、ずっと変わらないものである立地と校訓・教育目標は、その学校を形作る非常に重要な根本の要素であり、その他の要素と様々な関係を持っている。このような要素が複雑に絡み合って学校の役割を規定しており、それらが多様化することは明白である。次に学校生き残り戦略について考察した。学校の生き残りとは、新規入学者の獲得の中で生き残る、地域社会から受け入れられ地域の中で生き残るという文脈での生き残りと定義する。学校生き残りをかけて学校、教師たちは様々な取り組みを行ってきている。地域社会に密着して生き残っていくためには、地域住民に学校の存在が受け入れられること、地元の中学校などと連携を取っていくことが重要だとわかった。直近ではＢ高校が県内ではじめてコミュニティスクールに指定された。このような制度を有効活用していくことが求められる。最後によりよい学校づくりに必要なことについて考察している。学校や地域の特色に応じて地域社会と学校が相互により深い関係を結んでいくこと、そして教育現場の教師が積極的に子どもたちに学びを保障すること、自己肯定感を高める指導をすることの二つを挙げている。前者について、地域社会と学校が連携することは地域社会を支えることのみならず地域人材を有効に活用できるというメリットがある。校舎に関して、教育活動でのより良い指導が子どもたちの学習環境の改善やよりよい社会化につながり、結果的に階層再生産に歯止めをかけることにつながると考えた。

目次

1.　はじめに　5
2.　先行研究　6
2.1　近代社会以降の学校の社会的機能　6
2.1.1　子供を社会化する場としての学校　6
2.1.2　階層再生産に加担する学校　6
2.1.3　現代日本における学校と社会　7
2.2　現代日本における学校と家族との関係　9
2.2.1　家族の持つ教育プレッシャーと学校　9
2.2.2　貧困の問題と学校　10
2.3　いまの学校教育を取り巻く環境　11
2.3.1　学習指導要領改訂における学校の役割　12
2.3.2　中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」　12
3.　調査分析　13
3.1　調査概要　13
3.2　校訓・教育目標　13
3.3　生徒・保護者　15
3.4　社会からのニーズ　17
3.5　立地　18
3.6　地域とのかかわり　20
3.7　教育行政・政策　23
3.8　学校戦略・現場教員の活動　25
4.　考察　26
4.1　多様化する学校役割　26
4.1.1　学校の役割を規定する諸要素　26
4.1.2　関係の深い諸要素についての考察　28
4.1.3　学校の社会的機能についての考察　29
4.1.4　小括　30
4.2　学校生き残り戦略　30
4.2.1　「学校生き残り」の定義　31
4.2.2　「学校生き残り戦略」の内容とＩ先生の試み　31
4.2.3　地元中学校との密着戦略　34
4.2.4　コミュニティスクール　35
4.2.5　まとめと考察　35
4.2.6　小括　37
4.3　よりよい学校づくりのために　37

5.　おわりに　39
参考文献　40